
視覚記号におけるコンセンサスの研究

-漢字文化圏に特有の表意記号を題材として-

Research on Consensus in Visual Symbols

- Focusing on Chinese Characters as Ideographic Symbols -

■ 酈 昊 LI HAO

愛知県立芸術大学大学院 佐藤直樹研究室

Aichi University of the Arts

■ キーワード：視覚記号、古代漢字、臨場感、ピクトグラム、過程の行為

はじめに

中国では、古代から現代に至るまで「表意記号」である漢字という体系を保ち続けてきた。主に西欧においては、表意記号特有の造形的な複雑さや意味の多義性・多様性を持つ漢字は、アルファベット等の「表音記号」と比較して、非効率的で原始的な文字体系であるとされてきた。

しかし、技術の発展により情報処理能力が格段に向上・進化したことで、漢字の特徴である「複雑な意味を持つ記号性」と「多様な造形を展開する芸術性」に対する研究が進展している。本研究では、最初期の漢字の形態である「甲骨文」および「金文」の特徴を分析し、現代における視覚的な記号の認識度を向上させるための方法・表現へ繋げることを試みる。

1. 先行研究

2023年、中国の浙江理工大学の環境空間を対象としたサインデザインプロジェクトに携わった。その際に、ピクトグラムの認識度に関する調査を実施した結果、誰も理解しているであろうと思われたピクトグラムであっても、その認識度はサインデザイン設置者の期待よりも低いという事実が判明した。このことから、情報過多の現代社会において、ピクトグラムが本来期待されている役割を十分に果たせていないのではないかと疑問が生じ、「視覚記号(ピクトグラム)のコンセンサス」というテーマが研究課題として浮上した。

中国のデザイナー梅数植による「文字出口」(2021)というプロジェクトでは、表意記号である漢字とピクトグラムには、何らかの関連があるという可能性を提示した。漢字本来の姿である線形のテキストを画像に切り替え、象形的な視覚記号として提示することができるこの仕組みは画期的なものであったが、この視覚表現は漢字文化圏に居住している人々の間でしか解読できないものであった(図1)。

しかし、非漢字文化圏の人々の間にあっても、象形的な視覚表現を通じて図形の示す意味を理解することは可能であ

ろう。古代に発生した漢字の造形表現のなかに、意味についてのコンセンサスを得るための要点が秘められているのではないかと仮説のもと、本研究では表意記号である漢字とピクトグラム両者の共通点を探っていく。

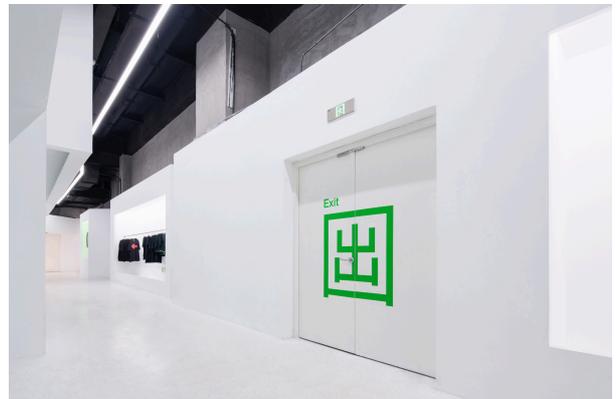


図1 「文字出口」のサイン例

2. 甲骨文、金文について

本研究では、まずは現在のピクトグラムの使用状況を調べた上で、認識度が低い一部のピクトグラムに対し、視覚と理解のコンセンサスにおける問題を見つける。次に、中国古代文字(甲骨文・金文)の構成要素と特徴を比較した上で、現代のピクトグラムの理解度を向上させることを目的とした、造形理論の新たな視点を提供する提案と試作を行う。

2.1. 甲骨文

甲骨文字は、漢字の起源として古代中国において広く知られている。殷商時代には、人々は亀甲や牛の肩甲骨、大腿骨などの材料に刻画を行い、主に王室と占い情報や活動を記録していた。1899年、河南省安陽において甲骨文が偶然

発見された。これらの亀甲や骨片は、それ以前には「竜骨」と呼ばれ薬材として使用されていた(図2)。その後、学者の王懿榮がこれらの甲片を発見し、収集したうえで詳細な研究と解説を行った。



図2 甲骨文の例(牛骨刻辞)

2.2. 金文

金文は、甲骨文とほぼ同じ時代に使用された漢字の一形態であり、主に青銅器に刻まれた文字を指す。これらの文字は、殷商時代から西周時代にかけて使用された。商代の金文には多くの象形文字が含まれており、その種類も豊富である。これは、商代金文の大きな特徴である(図3)。

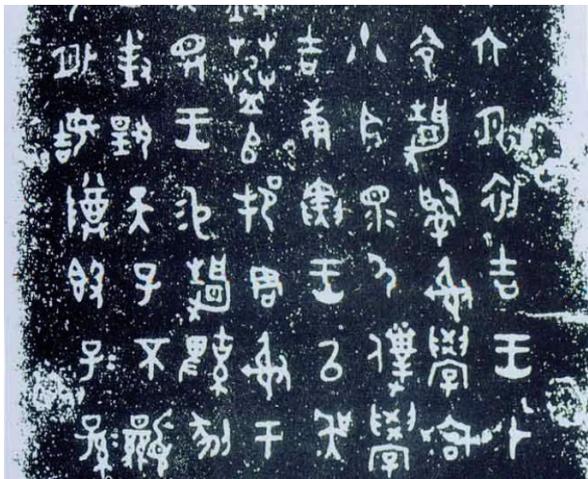


図3 金文の例(西周中期「静簋」)

3. 古代漢字から現代視覚記号へ

創作の視点から見ると、甲骨文字の刻写スタイルは比較的自由であり、文字の大きさは主に筆画の多さに準拠していた。筆画が多い文字は大きく、筆画が少ない文字は小さくなる傾向があり、全体的な結体は自然で滑らかに見える。

一方、金文は初期においては甲骨文字の刻写スタイルを継承していた。しかし、金文の発展と共に、特に中期以降は文字の形が次第に規則的になり、初期のような自由な刻写ではなく、より規範的で厳密な方向に進化していった。

紀元前 11 世紀に書かれた『何尊』には、「中国」の二文字が最初に記録されていることが確認できる。1996 年、翼のデザインが入ったその「中」という文字、中国邮政のロゴマークに使用された(図4)。このデザインは、中国古代において情報伝達を表す比喩である「鴻雁伝書」を連想させるものであると考えられる。

このように、漢字は当初から造形構成要素に絵画的・意味性を内包するものであり、そこには現代におけるシンボルマークやピクトグラム等の視覚記号に共通する特徴が見られる。



図4 何尊銘文から視覚記号へ活用例

3.1. 古代漢字の構成要素

甲骨文と金文の構成要素が模倣する対象は、人、骨、動物、山、川、雲雨雷電、寝具、食器、抽象的な範囲など、多岐にわたる。一部は側面や正面から全体の形を捉え、簡単な線で事物の具体的な形象を描く(図5)。



図5 具体的なかたちを描く文字

また、事物の複雑な全体を部分的な特徴に抽出して置き換えているものもある(図6)。実物を表現する際、甲骨文は直接その外観を模倣しているが、抽象的で外観を模倣しにくい事物や状態については、なんらかの記号を用いて文字を創造することがある。

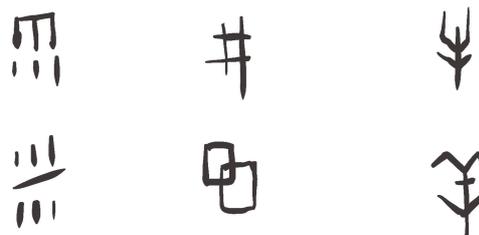


図6 部分的な特徴を描く文字

例えば、甲骨文字と金文の表現に見られる短い筆画、小さな点、弧線、方形などは、一見ただけではその意味を掴みかねる。しかし、小さな点は音・細かいもの・性徴などを表している。曲線または直線の短い縦横の筆画は気流・水流・光線・地平・空間範囲などを示す。弧状の線や方形は指示符号であるか、囲まれた空間や範囲を表していると考えられる(図7)。これらは、抽象的な概念や可視化しにくい現象などを効果的に表現するための記号として機能しているのである。



図7 細部を展示する文字

4. 「一字異形」

甲骨文字形の造字方式は、成熟した文字体系の一面を示しているものの、全体としては「状態」をイメージできるような表現に重きを置いており、「一字異形」の特徴を有している。

徐富昌によると、甲骨文と金文の一字異形の文字は、多くの人々によって作成されたと推測される。人によって表現対象への視点が異なるため、描写された物の細部も異なっているのだ。異なる意味を持つ記号は、同一の意味を表す場合でも、多様な変化を示す可能性がある[注1]。これらは、甲骨文と金文の独自の特徴である。「一字異形」の文字の構成には以下の特性がある。

- ・画数に拘らない
- ・偏旁の位置や数が一定しない
- ・構成要素の正像と鏡像(図形の左右や上下が反転した形)の区別がない

その文字にとって重要な構成要素を保有・表現していれば、偏旁の構造に増減があったり、位置がずれたり、形状が異なったりしても、同じ文字と見なされるのである。

4.1. 一字異形の臨場感

甲骨文と金文の辞典で、同じ意味を持つ異なる出典の文字を統合して配列すると、その文字の配列から、ある行為過程の簡略化を見出すことができる。それはまるでカメラで記録するかのように、一瞬で当時の行為や動作を捉えたものに似ている。例として、鹿という文字を使って整理してみた(図8)。

このように、四つの文字は形態が異なるものの、いずれも「鹿」を表している。これらの文字を並べることで、あたかも一連の動作の流れが形成されているかのように見える。具体的には、「一匹の鹿がこちらを見て、立ち上がって、遠くを見渡し、その後、別の方向に向く」という一連の動作である。この表現は、鑑賞者に短い物語を読み込んだような臨場感と理解をもたらす効果がある。

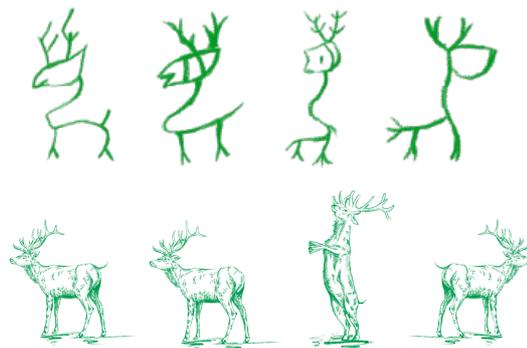


図8 一字異形「鹿」の例

4.2. ピクトグラムへの応用

情報の伝達内容が非常に多様化した現在、人々が情報を正確・適確に判断し解釈をすることが難しくなっている。古代の人々における甲骨文および金文の一字異形に対する理解度は、現代のピクトグラムに応用できるのではないかと。

広村正彰が提唱したデザインの速度理論においては、「遅いデザイン」の概念が言及されており、ピクトグラムとその他の媒体を通じて即座に理解を促すのではなく、人々を徐々に導き、理解後に愛着を生じさせるデザインが重視されている。本研究におけるピクトグラムのデザイン理念は、このような情報伝達の理念と共通するものであり、人が感じる臨場感やピクトグラムの解読の正確率を大幅に向上させることができるよう設計されることになる。

5. 試作

以上の分析と、佐藤直樹が指摘した中国漢代の画像石に見られる情報伝達の手法とは非常に類似している。佐藤によれば、単に物理的な表現のリアリティを考慮するのではなく、図形という視点から伝達すべき本来の意味を明確に表現することを目指したという[注2]。

古代の視覚記号において、一字異形は非常に一般的であっただけでなく、現代の象形標識においても見られる。例えば、特定の種類の車両通行区分の規範標識においては、意図をより明確に伝えるために、道路と車両を異なる視点で表現しており、標識の理解度を大幅に向上させることができる(図9)。

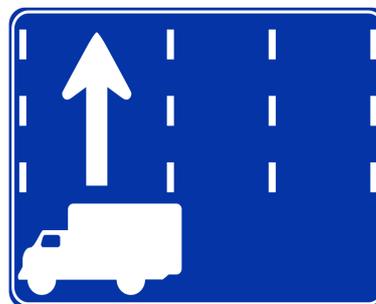


図9 特定の種類の車両通行区分の規範標識

試作においては、シンプルな造形を用いながら臨場感をどのように表現するかが非常に重要である。甲骨文と金文の一字異形の特徴を出発点とし、「行為の過程」を捉えることでそ

の特徴を表現することを試みた。

行為の過程が比較的明確に見える印刷室をその一例として挙げ、甲骨文における「人」の視覚的表現を参考にし、内容の表現に適した角度から新たな「字」を構築した(図10)。この例にとどまらず、現代の象形図において広く認知されている駐車場の標識「P」は、既に定着しているものの、図形を通して本来の意味を真に伝えるには至っていない。そのため、試作では、新たな視覚的伝達手法を提供し、現代の視覚記号のコンセンサスに対して再探索を試みる。



図10 プリント室のピクトグラムの試作

案内用ピクトグラムは、同一の場所で多数のピクトグラムを使用することが難しいため、これらをどのように組み合わせ、それぞれの人に強い臨場感を与えるかが課題となる。したがって、レンチキュラー印刷を使用することを試みた。

レンチキュラー印刷とは、見る角度によって絵が変わり、アニメーションのように動いて見えたり立体に見えたりする技術である。異なる角度から人に異なる画像を提供でき、人が移動する際にピクトグラムが行為をする過程に応じて変化する。これにより、認識の時間はある程度が低くなるものの、人の臨場感と明確さを大幅に向上することを狙いとした(図11)。

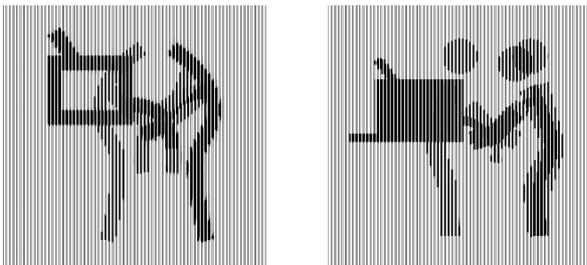


図11 レンチキュラー印刷の試作

おわりに

本研究は、現代の視覚的記号のコンセンサスの向上を目的とし、古代中国の象形文字における一字異形の特徴を再発見することを通じて、人の行為過程に基づくピクトグラム制作に関する研究をまとめたものである。

2024 年度には、構想、仮説、そして大量の文献調査および分類整理を行い、甲骨文と金文に見られる一字異形の特徴から臨場感をもたらす原理を発見し、それを基に現代ピクトグラムの試作に着手した。周囲の事物を観察した上で、「タクシー乗り場」のピクトグラム試作例として、「車」という古代文字の一字異形や構成要素から発想し、現代に適した新たな象

形文字を創作し、理論化に基づくピクトグラムをデザインした(図12)。



図12 一字異形や構成要素からピクトグラムの試作

2025 年度には、本年度の研究を基に試作を進めると同時に、廣村正彰の遅いデザイン概念を参考にし、より人間的で温かみのあるデザインの提案を行いたい。

注、引用

- 1) 徐富昌、「從甲骨文看漢字構形方式之演化」、臺灣大學文學院『臺大文史哲學報』、2006 年、22ページ
- 2) 佐藤直樹、「中国漢代画像石の研究－図像解析によるヴィジュアルコミュニケーション技術の解明－」、『愛知県立芸術大学紀要』、2ページ

他参考文献

- ・ 太田幸夫、『PICTOGRAM DESIGN』、柏書房、1987 年
- ・ 広村正彰、『SPACE GRAPHYSM』、六耀社、2002 年
- ・ アイデア編集部、『アイデア 401 都市空間のみちしるべ』、誠文堂新光社、2023 年 4 月
- ・ オットー・ノイラート 永原康史、『アイソタイプ』、ビー・エヌ・エヌ新社、2017 年
- ・ 徐無聞、『甲金篆隶大字典』、四川辞出版社、2008 年